

まえがき

現在日本では、「取調べの可視化」の実現に向けての議論が大詰めを迎えています。日本の司法制度をより開かれたものとして改革していくためには、取調べの可視化において先行する諸外国の事例を参考にしながら、既存の法律・制度に関わる議論のみならず、心理学や社会学などの知見に加え、近年の技術の進歩などを踏まえた、国際的・分野横断的な議論を進めていくことが必要です。

このような問題意識から、文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究「法と人間科学」、立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構拠点形成型 R-GIRO「文理融合による法心理・司法臨床研究拠点（法心理・司法臨床センター）」、および立命館大学人間科学研究所・文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「インクルーシブ社会に向けた支援の<学=実>連環型研究」の3者が協力し、国際シンポジウム「取調べと可視化—新しい時代の取調べ技法・記録化と人間科学—」を、2014年7月に開催いたしました。

このシンポジウムではまず、企画者側からの挨拶、情報学者による基調講演、および心理学者による招待講演の後、取調べの可視化において先行するオーストラリアおよび韓国の法学者と心理学者が発表を行い、それらに対して日本の司法実務家が意見を述べるというという形で議論を進めました。最後の全体討議では、日本の法心理学や供述心理学を牽引する研究者が、新しい時代の取調べ技法や記録のあり方に関する議論を行いました。シンポジウム当日は、登壇者のみならず会場からも、海外や日本の現状に関する質問、意見、疑問点などが出され、長時間に渡って、建設的かつ充実した活発な議論が行われました。

本冊子は、この国際シンポジウムの中で行われた、基調講演、招待講演、研究発表、パネル討論、および登壇者とフロアとの質疑応答にいたるまで、すべての企画に関する記録をまとめたものです。これまで日本国内では、司法実務家を中心として、取調べと可視化に関する議論が行われてきました。ただ、法学者、心理学者、情報学者、および司法実務家が一同に介し、さらに国境と学問分野を超えて活発な議論を行った国際シンポジウムは他に例がないと考えて

おります。

その意味で本冊子が、取調べの可視化をめぐる各国の現状や日本の課題について理解を深め、取調べの可視化を含めた日本の司法制度改革についての議論を発展させるきっかけとなれば幸いです。

2015年1月

立命館大学人間科学研究所・
文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「インクルーシブ社会に向けた支援の<学=実>連環型研究」
代表 稲葉光行